

9 世紀後半の東西教会関係 ——アナスタシウス・ビプリオテカリウスの活動から——

岸田 菜摘

はじめに

東西のキリスト教会史家にとって、東西教会の分裂という歴史上の事件は常に、最も大きな問題のひとつとして研究の対象とされてきた。本来一つのものであるべきとされるキリスト教会が、教会組織として東西に分裂し、また慣習や教義に関わる問題においても、それぞれ異なる見解を持つにいたった原因とは何であるのかという疑問には、東西教会それぞれの立場から様々な分析、ないし主張がなされている。

そのなかでも特に、一般的に東西教会の分裂の最も象徴的な事件として取り上げられるのは、1054 年の東西教会の相互破門であり、古典的な研究ではこの相互破門こそが両者の歴史の「分水嶺」であったとされてきた¹。しかし現在では東西教会の分裂、ないしそれぞれの異なる発展は長い過程の末に形成されたものであり、必ずしも 1054 年の事件が重要であるとは言えず、むしろ分裂の萌芽は既に 9 世紀ごろには存在したという見解が優勢であるように思われる²。

9 世紀後半の東西教会関係の研究としては、当時の東西教会の対立、いわゆる「フォティオスのシスマ」を対象としたドヴォルニクによるモノグラフが 1948 年に刊行されている³。ドヴォルニクはそれまでの、シスマの原因をフォティオス側に求める西ヨーロッパ側の研究を否定し、彼があくまでビザンツ教会内部の派閥争いに巻き込まれる形でシスマに関与したこと、ローマ教会との和解に努めたこと、そしてそれまで言われてきた、880 年以降にフォティオスとローマ教会の間に起こったとされるシスマが実際には存在しないことを論証した。

基本的にはフォティオスのシスマに関してはこのドヴォルニクの研究が今現在に至るまで受け入れられているが、さらにジュディス・ヘリンは 1987 年に 8-9 世紀の東西教会関係について、1974 年のペリによる五本山制概念の研究をもとに、9 世紀後半にはムスリム勢力の支配下に入った他の三総主教座が衰退するとともに、ローマとコンスタンティノーブルがそれぞれ宣教活動によって己の影響圏を拡大したことで、五本山制の理想が解体していく過程が「フォティオスのシスマ」に見られるとした⁴。

¹ 1054 年の事件に関しては、例えば H. Chadwick, *The Making of a Rift of in the Church, from Apostolic Times until the Council of Florence*, 2003, pp. 200-218.

² F. Dvornik, *Byzantium and the Roman Primacy*, New York, 1966.

³ Id., F. Dvornik, *The Photian Schism*, Cambridge, 1948.

⁴ J. Herrin, *The Formation of Christiendom*, Princeton, 1987; V. Peri, "La pentarchia: istituzione ecclesiale (IV – VII sec.) e teoria canonicoteologica," in *Bizanzio, Roma e l' Italia nell'Alto Medioevo, Settimane di studio*

しかし、教会史が主に東西教会関係についてローマとコンスタンティノーブルそれぞれの拡大を論じているのに対して、政治史はこの時期、ビザンツ帝国がイタリア半島への干渉を強めていったと指摘し、ローマ教会はビザンツへの妥協を余儀なくされたとする。この時代のビザンツがイタリアに進出していった経緯は、1991年のクロイツによる研究で分析されている⁵。日本でも小林氏や竹部氏の論文で、ビザンツ側からイタリア半島への再進出については分析がなされている⁶。このように、ローマとコンスタンティノーブルの間の力関係を対等なものとする傾向にある教会史と、ビザンツ側の方が優勢であるとする政治史の間には断絶が存在する。

本研究で取り上げるのは、この9世紀後半の東西教会の間で実際に交渉役・翻訳者を務めたアナスタシウス・ビブリオテカリウスという人物の書簡である。この人物についての詳細は後述するが、彼はギリシャ語能力を評価されてローマ教会、及びフランクの代弁者としてビザンツと交渉しつつ、また他方では聖人伝などのギリシャ語キリスト教文学をラテン語に翻訳した人物として知られている。ローマ教会の枢機卿司祭である彼は、教皇ニコラウス1世、ハドリアヌス2世、ヨハネス8世に仕え、ラテラノ文書局長の前身である司書、「ビブリオテカリウス」としてローマ教会の図書館を管理しつつ、彼らの教皇書簡の編纂や教皇の伝記集である『教皇の書 *Liber Pontificalis*』の編纂にもかかわった。本研究では特に彼の書簡を分析の対象とし、その言動から当時の東西教会の交渉の実態を探っていきたい。

アナスタシウスと当時のローマ教会、特に教皇ニコラウス1世に関する研究は、古くは1885年のラポートルの研究で、アナスタシウスこそがニコラウス1世の政策の主なブレーンだったという説が唱えられた⁷。しかしその後、1920年のエルンスト・ペレルズの研究ではアナスタシウスがニコラウス1世を陰で操っていたというラポートルの見解は否定され、ニコラウス1世に対するアナスタシウスの影響力は限定的なものであり、あくまでこの時代のローマ教会の主役はニコラウス1世であるという説が唱えられた⁸。

その後、アナスタシウスは主にイタリア人研究者たちによって研究されている。ジローラモ・アリナルディはアナスタシウスのバイオグラフィ、および彼の活動を政治と文化の両側面から分析している⁹。またクラウディオ・レオナルディは1967年の論文で、第八公会議事録のラテン語写本は翻訳者自身の手によるものとし、また1980年の論文ではアナスタシウスの翻訳の、同

del Centro italiano sull'alto medioevo, XXXIV, Spoleto, 1987, pp.209-311.

⁵ B. Kreutz, *Before the Norman: Southern Italy in the Ninth and Tenth Centuries*, Philadelphia, 1991.

⁶ 竹部隆昌「9～11世紀南イタリアとコンスタンティノーブル」『文化史学』44、1988年、106-121頁。小林功『中期ビザンツ帝国の社会と皇帝権力』、博士学位請求論文（京都大学）、1997年。

⁷ A. Lapôte, *De Anastasio Bibliothecario Sedis Apostolicae*, Paris, 1885, repr. in *Études sur la papauté au IXe siècle*, ed. by Girolamo Arnaldi and A. Vauchez et al., Torino, 1978, pp. 121-466.

⁸ E. Perels, *Papst Nikolaus I und Anastasius Bibliothecarius*, Berlin 1920.

⁹ G. Arnaldi, "Anastasio Bibliothecario." *Dizionario Biografico degli Italiani* 3, Rome, 1961.

時代の教皇政策の中における意味を論じた¹⁰。パオロ・キエザはアナスタシウスのテキスト翻訳の理論と実践について論じている¹¹。

主にこれらの先行研究によって、アナスタシウスの活動の多くが既に分析されていると言ってよい。しかしこれらの成果がより大きな研究の枠組み、たとえば東西教会世界の関係史などでその意味を検討されることは未だに少ない。本研究ではアナスタシウスに関する最新の研究成果を参照しつつ、彼の眼を通して9世紀後半の東西教会の関係性について検討したい。

本論文では、史料としてローマ帝国末期から1500年にかけてのドイツおよび西欧中世の史料を集成した *Monumenta Germaniae Historica* に収録された、アナスタシウスによる書簡を主に扱う。アナスタシウス・ビブリオテカリウスはニコラウス1世、ハドリアヌス2世、ヨハネス8世といった教皇や、西フランク王で皇帝となるシャルル2世、同僚の助祭ヨハネスなどに宛てて書簡を送っている。そのほとんどが翻訳の依頼主に対する書状で、全部で18通が現存している。

1 9世紀後半の東西教会

前述したように9世紀には、東西教会はそれぞれ新たな発展の局面を迎えたとされている。まず西方の状況として大きな変化の要因と考えられるのが、8世紀半ば、ローマ教会が軍事的な支援を旧主であるビザンツ帝国から、新たにフランクのカロリング朝に求めざるを得なくなったという出来事である。この結果、ローマ教会は以前から続くビザンツ帝国との政治関係に加えて、カロリング朝との新たな同盟関係を模索し、東西間の交渉だけではなくヨーロッパの南北間の関係が、新たに重要な政治の要因として現れた¹²。800年のカール大帝の戴冠はその象徴的な事件であると言える。

このような政治上の変化は、ローマ教会自体をも変質させたと考えられている。いわゆる「ピピンの寄進」によって教皇領を得た教会は、ローマを中心とする地域の世俗権力としても新たに生まれ変わった。8～9世紀にはラテラノの文書局など、後の教皇庁を支える様々な制度が現れ、一種の独立国家としてのローマ教会がこの時期に生まれたとも論じられている¹³。

9世紀後半に入ると、ラテン＝カトリック世界の展開は更に進んでいった。カロリング朝はルートヴィヒと敬虔帝の死後、彼の3人の息子たちによって843年に西フランク・東フランク・中部フランクの三つの王国に分裂した。当然のことながら、ローマ教会はそれぞれの王国との外交関係

¹⁰ C. Leonardi, "Anastasio Bibliotecario e le traduzioni dal Greco nella Roma altomedievale." *The Sacred Nectar of the Greeks*, ed. M.W. Herren, pp. 277-97.

¹¹ P. Chiesa, "Ad verbum o ad sensum? Modelli e coscienza metodologica della traduzione tra tarda antichità e alto medioevo." *Medioevo e Rinascimento* 1 (1987), pp. 1-51; P. Chiesa, "Filologia e politica nella Roma di Anastasio Bibliotecario," *Rivista di storia della chiesa in Italia* 67 (2013), pp. 543-568.

¹² J. Carol, *Pope Nicholas I and the First Age of Papal Independence*, diss. of Columbia University, 1980, p. 55.

¹³ T. F. X. Noble, *The Republic of St. Peter: The Birth of the Papal State, 680-825*, Philadelphia, 1986.

を続けていくが、さらにカロリング朝の版図の外に広がるスラヴ人地域、すなわちモラヴィアやブルガリアなどへの新たな布教活動によって、その外交活動の範囲は旧来よりも拡大し、ローマ教会は西ヨーロッパ各地に存在する大小の世俗君主たちとの新たな関係を模索したとされる¹⁴。

しかし、旧来のフランク国家、あるいはビザンツ帝国との関係の重要性も薄れたわけではない。軍隊を持たないローマはフランクの軍勢力による支援を欠かすことはできなかった。また8、9世紀にはかつてイタリア半島を支配していたビザンツ帝国は、東方のイスラム勢力との戦争に忙殺され、かつての影響力を縮小したと論じられるが、しかしその影響力を失ったわけではなかった。ローマ教会にとって皇帝は未だに権威であり、コンスタンティノープル総主教に世俗の官僚出身のフォティオスが選ばれたことを非難したニコラウス1世も、皇帝の総主教選出における権利や公会議召集の権利については異議を唱えていない¹⁵。加えて、867年に皇帝に即位したビザンツのマケドニア朝初代皇帝バシレイオス1世は、即位当初からイタリアに対して関心を示し、繰り返し遠征部隊を派遣している。皇帝ロドヴィコ2世と同盟して南イタリアの港バーリをイスラム勢力の手から奪還すると、その後徐々に南イタリアに領土を増やしていった¹⁶。このように、9世紀後半のローマ教会はフランクとビザンツという二つの大国、それにその周辺の新しい世俗君主たちとの関係のなかで存立していたと言えるだろう。

一般的な東西教会関係史において、9世紀後半にはビザンツの正教会とローマ教会の対立、いわゆる「フォティオスのシスマ」が問題となったとされる。事の発端は総主教イグナティオスが宮廷での勢力争いの結果失脚し、世俗の官僚出身のフォティオスが次の総主教として選ばれたことに対して、ローマ側が世俗の人間を総主教に任命したこと、またローマ教会の承認なく即位したことに対して異議を唱えたことに始まる。861年、時の皇帝ミカエル3世の招集によって聖画像破壊を公式に断罪するために開かれた公会議でフォティオスの即位が公に認められたが、ローマ教会はこれに異議を唱えて863年ローマの教会会議でフォティオスを罷免する宣言を出し、これに対してフォティオス側は867年の公会議でニコラウス1世を破門している。

当時のビザンツ帝国の正教会は、一般的には拡大の時期とされている¹⁷。843年にイコノクラスムが終わり、聖画像崇敬が正統信仰と認められたことは、単にビザンツ国内の問題だけではなく、聖画像崇敬を正統信仰と認めていた他の四つの総主教座と共にビザンツ教会の間の断絶がひとつ解消されたということを意味していた。861年の公会議は、フォティオスの総主教即位の確認と同時に、公にイコノクラスムの終結を宣言し、キリスト教世界の統一が回復されたということを知らしめるためのものだった。世俗の官僚出身で元総主教イグナティオスの派閥との対立を抱えていたフォティオスにとっても、861年の公会議でイコノクラスムの根絶を宣言した背景には、

¹⁴ M. Betti, *The Making of Christian Moravia: Papal Power and Political Reality*, Leiden, 2014.

¹⁵ J. Carol, *op. cit.*, pp. 96-100.

¹⁶ B. Kreutz, *Before the Norman: Southern Italy in the Ninth and Tenth Centuries*, Philadelphia, 1991, pp. 55-74.

¹⁷ D. Obolensky, *The Byzantine Commonwealth: Eastern Europe 500-1453*, London, 1971.

その威信を増大させるという狙いがあったものと考えられる。

またローマ教会と同様、9世紀後半にはビザンツ教会による宣教活動も行われた。有名なキュリロスとメトディオスによるモラヴィア宣教は、むしろ現在の研究ではローマ教会の管轄下で行われたということが明らかになっているが、ブルガリアに対しては正教会の監督のもとに宣教師たちが送りこまれた。しかし、ブルガリア教会の成立は、その裁治権を巡る東西教会の対立をも引き起こした。ブルガリアの支配者ボリスが正教会側から洗礼を受けたのは865年頃のことだが、その翌年にはボリスはローマ教会に対して宣教師の派遣を要請し、今度はローマ教会との関係を親密なものとした。9世紀後半における東西教会の対立点はこのふたつ、すなわちフォティオスの総主教即位の不法性とブルガリア教会の裁治権だったと言えるだろう。

867年にローマ教会側ではニコラウス1世が死去し、ビザンツ側でも皇帝ミカエル3世が次の皇帝バシレイオス1世のクーデターによって殺され新たな王朝であるマケドニア朝が始まると、870年には新たな皇帝によって罷免された総主教フォティオスの断罪がなされた。しかし、ローマ教会に対するビザンツ側の譲歩は限定的であり、ブルガリア教会は最終的には正教会の裁治権に属することに決定され、またフォティオスもその後総主教に復帰し、879/880年のコンスタンティノーブル公会議ではローマ教会とコンスタンティノーブル総主教の間で和解が宣言された。

東西教会史の概説ではしばしば、このフォティオスのシスマにおいてニコラウス1世は東の教会に対してローマ教会がペトロの後継者として、キリスト教世界の頂点であると主張したとされる。ニコラウス1世による主張は、後の教皇庁の発展の先駆的現象であるとも評価されてきた¹⁸。

ニコラウス1世はビザンツ教会との間だけではなく、西ヨーロッパ世界の内部においても様々な機会において、ローマ教会の優越性を主張した。その一つとしてはまず、ラヴェンナ大司教ヨハネスやランス大司教ヒンクマルなど、ローマ教会と西ヨーロッパの他の有力な教会との競争関係が挙げられる¹⁹。ラヴェンナ大司教はローマ教会からの独立を主張し、部下の聖職者たちがローマに訴えることを妨げ、ニコラウス1世はこれに対して、皇帝ロドヴィコ2世の協力のもとに861年に教会会議で教会会議を開き、そこでラヴェンナ大司教がローマ教皇に従うよう決議させた。またランス大司教ヒンクマルが前任のエッポと対立し、前任者によって叙階された聖職者たちを罷免したのに対し、ニコラウス1世はソワソンの教会会議でヒンクマルによる聖職者たちの罷免を認めず、聖職者たちが元の品級に戻ることを命じられた。

第二としては、ニコラウス1世がロドヴィコ2世の兄弟であるロタリンギア王ロタール2世の離婚・再婚問題に干渉したことが挙げられる。ロタール2世の再婚は最初2人の大司教テウトガルドとグンタールによって認められたが、ニコラウス1世はローマ教皇としては初めて、世俗君

¹⁸ K. Herbers, *Geschichte des Papstums im Mittelalter*, Darmstadt, 2012, p. 83.

¹⁹ R. J. Belletzkie, "Pope Nicholas I and John of Ravenna: The Struggle for Ecclesiastical Rights in the Ninth Century," *Church History* 49, 1980, pp. 262-272.

主の再婚問題に干渉してこれを認めず、再婚を認めた大司教たちを破門した。ニコラウス 1 世の強硬な態度によって、最終的にはロタール 2 世の再婚は正当なものとは認められず、彼の残した領土は兄弟である東西のフランク王国によって再分割された。

これらの活動を通じてニコラウス 1 世は、繰り返し教皇を頂点とする西ヨーロッパ全体の教会の統一を主張している。またそれだけではなく、他の総主教座に対する優越性をも書簡の中で訴え、教皇の主催する教会会議を公会議と呼びはじめ、ローマ教皇が在地の聖職者の訴えを直接聞くことが出来るという特権を主張した。これらの言動を額面通りに受け止めれば、ニコラウス 1 世の目的は西ヨーロッパ全体の教会の統一であつたようにとれる。

ニコラウス 1 世時代のローマ教会を専門とする研究者のジェイン・カロールによれば、ニコラウス 1 世の主張の下地として、8 世紀半ば頃から様々な奇跡譚など教皇の霊的な権威に関する言説と、軍事的な力を持たない教皇が権威としては周囲の世俗君主に優越するというローマ教会の首位権の前身とも言うべき主張が徐々に表れたとされる²⁰。860 年代に、ニコラウス 1 世が教皇の権威に関する強力な主張が来た背景としては、この時代にはカロリング朝が分裂して以前ほど強力な権力を持っていなかったこと、またその一方でフランクの軍事力によって守られていたこと、そしてロタールの離婚問題やビザンツにおけるフォティオスとイグナティオスの対立など、周囲の論争をうまく利用出来たことなどが挙げられている²¹。

しかし、ニコラウス 1 世によるローマ教会の優越性の主張は、実際には限定的にしか実現しなかったということも出来る。彼が直面した問題からも、当時のローマ教会が必ずしも西方ヨーロッパのキリスト教世界を代表して纏め上げる存在ではなく、むしろ他の有力な都市の教会やカロリング朝の国家教会とは、しばしば対立する関係にあったことがわかる。またニコラウス 1 世の死後、ハドリアヌス 2 世やヨハネス 8 世の時代においても、たとえばモラヴィア宣教においてローマ教会とババリアの聖職者たちの対立が起こっている。ローマ教会の優越性は、少なくとも当時においては西ヨーロッパ内部でさえ実現しきつたとは言えない主張だった。

また教義の面に関しても、ローマ教会の意見は必ずしも西ヨーロッパの総意を代表するものではなかった。787 年に第 2 ニカイア公会議で聖画像崇敬の正統性が認められ、ローマ教会もこれに賛同したのに対して、カロリング朝の聖職者たちは 795 年の教会会議で聖画像崇敬を偶像崇拜として非難し、9 世紀後半には未だに第 2 ニカイア公会議を第 7 回の全地公会議として認めてはいなかった。総主教フォティオスが初めて指摘した「フィリオクエ」の問題も、ローマ教会ではフィリオクエを含んだ信条が唱えられていなかったのに対し、フランクの教会では使用されていた。「フォティオスのシスマ」では、これら教義・慣習上の東西教会の差異が総主教フォティオ

²⁰ J. Carol, *Pope Nicholas I and the First Age of Papal Independence*, diss. of Columbia University, 1980, pp. 46-95.

²¹ K. Herbers, *op. cit.*, p. 83.

スによって批判されている²²。ローマ教会としてはビザンツ側の慣習と自分たちの慣習が同じであると主張したが、フランク教会側の慣習を変えるまでには至らなかった。

むしろニコラウス1世による主張とは、現実のローマ教会の権威を示しているというよりは、ローマ教会がビザンツやフランクなど周囲の対抗勢力に対して自らの正統性を主張するためのプロパガンダと考えるべきである。カロルはニコラウス1世による主張を、自らが国家の版図内の教会の長であると考えたフランクの王たちに対抗して、それぞれの国家を超えた霊的権威として西ヨーロッパ全体の教会の長であると主張するようになったと論じている²³。フランク、ビザンツなど周囲のローマよりも強大な勢力と外交関係を結びつつ独立した一勢力として接しなければならなかったローマ教会が、彼らに対抗し自分たちなりのアイデンティティを形成するための言説が、ニコラウス1世の主張だったのではないだろうか。

しかし、ひとたび現実の政治的情勢が変われば、ニコラウス1世のような強力な言説を、軍事力を持たないローマ教会が持ち続けることは出来なかった。ロドヴィコ2世の死後ローマ皇帝位を継いでいたシャルル禿頭王が875年に死ぬと、フランクはローマに軍事力を提供する余力がなくなり、代わってローマ教会に対するビザンツの影響力はより強まった²⁴。879/880年の公会議では東西教会の和解が宣言されたが、フォティオスが総主教の地位に復活し、ブルガリア教会が依然としてコンスタンティノーブル総主教座の管轄のもとにあるというなかでの和解は、ローマ側の妥協と判断するべきものと思われる。

2 アナスタシウス・ビブリオテカリウス

アナスタシウス・ビブリオテカリウスは、9世紀後半の翻訳者、またローマ教会の文書局長として名高い人物である。本章では彼のキャリアと翻訳活動、そして教皇ニコラウス1世との関係性について触れ、その人物像を描き出したい。

アナスタシウスの前半生については、史料があまり残っていない。おそらく800-817年頃にローマ貴族の家系に生まれ、叔父はローマの有力者であるオルテ司教アルセニウスとされている。おそらくはローマのどこかでアナスタシウスはギリシャ語の知識を身につけたと考えられるが、場所はわかっていない²⁵。レオ4世の時代、おそらく847-848年頃にローマの聖マルケルス教会の枢機卿司祭となったが、その後職務放棄で罷免されている²⁶。

また、855年にベネディクト3世が教皇に選出されたときに、皇帝ロドヴィコ2世に支持さ

²² Photii Epistulae et Amphilochia, 5. vols., ed. by B. Laourdas and L. G. Westerink, Leipzig, 1983, Ep. 2.

²³ J. Carol, *op. cit.*, pp. 46-95.

²⁴ Kreutz, *op. cit.*, pp. 58-59.

²⁵ R. Forrair, *The Interpreter of the Popes. The Translation Project of Anastasius Bibliothecarius*, diss. of Central European University, Hungary, 2008, pp.15-16. アナスタシウスはギリシャ語の知識をローマにある正教会系の聖サバス修道院で学んだという説もあるが、定かではない。

²⁶ *Ibid.*, p.16.

れて軍隊と共にローマに入城した対立教皇アナスタシウスは彼のことであるとも推定されている²⁷。クーデターの試みはローマ貴族と聖職者によって阻まれ、教皇位はベネディクト3世に戻された。しかし、アナスタシウスはこれで失脚したわけではなく、次のニコラウス1世のもとで彼は聖マリア修道院の修道院長の職を得た。その後、次第に彼はニコラウスの秘書官として重要な地位を占めるに至った。

次にハドリアヌス2世によって867年、アナスタシウスはローマ教会のビブリオテカリウス、いわゆる文書局長に選ばれ、文書の作成や教皇書簡の作成、図書館の管理などを任される地位に就いた。しかし、869年にアナスタシウスの従兄弟が起こした不祥事のためにローマ教会を追われ、10月のサンタ・ブラッセデ教会で開かれた会議で罷免されてしまう。しかし翌年、アナスタシウスは皇帝ロドヴィコ2世の使節としてコンスタンティノープルに赴き、そこで皇帝の娘エルメンガルダとバシレイオス1世の息子との婚約交渉を行ったことが確認できる²⁸。

アナスタシウスは皇帝ロドヴィコ2世の使節としての活動の傍ら、869/70年の公会議にも公式の教皇使節と共に出席し、通訳として活躍した。公会議の議事録をローマに持ち帰ったアナスタシウスは、時をおかずにその翻訳を作成している。その後もハドリアヌスに仕えたアナスタシウスは、ナポリに赴いて教皇の外交使節としての役割を果たした。

また872年に即位したヨハネス8世のもとでも、879年頃に亡くなるまでアナスタシウスは引き続き文書局長の職にあった。874-5年にマントヴァへ外交使節として派遣され、翻訳者としては主に第2ニカイア公会議の議事録や年代記、聖人伝等を翻訳している²⁹。

アナスタシウスはその生涯を通じてローマ、フランク、そしてビザンツという三つの勢力の間でそのキャリアを歩んだ人間として、9世紀後半の東西ヨーロッパ関係の多面性を知る人物ということが出来るだろう。彼はローマ教会の聖職者としてそのアイデンティティをローマに置きつつも、時にはフランクの外交使節としてビザンツに渡り、ローマ及びフランクの代表使節として交渉を行った。

その一方、アナスタシウスは当時多くのギリシャ語文献をラテン語に翻訳した翻訳者としても広く知られている。アリナルディによれば、アナスタシウスや彼の友人である助祭ヨハネスなどの聖職者を中心に、当時のローマではカロリングルネサンスに影響を受けた小規模な、聖人伝や神学書などキリスト教文学を中心とする文芸復興活動が起こったともされる³⁰。

アナスタシウスが訳した文献としては、たとえば大バシレイオスやヨハネス・カリュビテス、聖アンフィロキウスなどの聖人伝、擬デュオニシオス・アレオパギテスや聖デメトリオスの受難

²⁷ *Ibid.*, p. 17.

²⁸ アナスタシウスは自らが代筆した皇帝ロドヴィコ2世名義の書簡を持ってビザンツに赴いた。

²⁹ R. Forrair, *op. cit.*, p.19.

³⁰ G. Arnaldi, "Giovanni Immonide e la cultura a Roma al tempo di Giovanni VIII," *Bullettino dell'Istituto Storico Italiano per Medio Evo e Archivio Muratoriano* 68, 1956, pp. 33-89.

伝、『マルティヌス教令集』、『テオファネス年代記』、『ニケフォロス年代記』、『シュンケロスのゲオルギオス年代記』という三つのギリシャ語年代記の翻訳の合本である『年代記三部作』、第7回・第8回公会議の議事録、エルサレムのソフロニウスの著作『聖キュリロスとヨハネスの奇跡譚』、イコニオンのアンフィロキウスの著作、証聖者マクシモスの著作、聖ニルスのネメルティウム宛書簡、「スラヴの巫使徒」メトディオスの兄弟であるコンスタンティノスの著作、ストゥディオスのテオドロスの『聖バルトロメオスについての説教』、ヨハネス・モスコスの『魂の牧場』などが挙げられる³¹。

アナスタシウスの著作活動はもちろん、ギリシャ語で書かれた優れた文学をラテン語に移植するというような文化的な側面もあったに違いないが、単にそれだけではなかった。彼が翻訳した文献はほとんど7世紀から9世紀にかけてのもので、著者の多くがコンスタンティノープル近郊かビザンツの東側の地域出身である³²。また中には「哲学者」コンスタンティノスの著作など、彼とほぼ同年代の人物のものも含まれている。ジャンルとしても教令集や公会議議事録、年代記などかなり実用的なものも多い。これは、単にアナスタシウスが有名な作品を翻訳したのではなく、ジャンルや作者を選別して訳していたことを意味している。

とりわけ注目に値するのが、アナスタシウスの訳した著作の作者の一部に、単性論やイコノクラスムなど何らかの事情でコンスタンティノープルを放逐されたり、あるいは皇帝や総主教からの圧迫を受けてローマに頼った人物がいるということである。特に有名な人物が証聖者マクシモスだが、第2次イコノクラスムで活躍したストゥディオスのテオドロスや、マクシモスの師で単性論と戦ったエルサレムのソフロニモスなどの著作が訳されている。もちろん彼らは、ローマ教皇を頼った理由は教皇の首位権を認めたからではなく、あくまでもビザンツ教会内の内部対立で不利な立場に立ったからこそ、名譽上五つの総主教座で最も格が高いとされるローマを頼ったというのが実態であるだろう。しかしアナスタシウスはその過去の事実をローマ教会の「正統信仰の護持者」としての権威を高めるために「利用」したと言える。

彼が仕えたニコラウス1世は、ローマを頂点として西ヨーロッパの教会世界を統一することを目標としていた。ローマを正統信仰の護持者と称賛するギリシャ語文献を扱ったアナスタシウスの翻訳は、教皇の霊的な権威を高めようとするニコラウス1世の目的を積極的に支えるものであっただろう。

当時のローマ教会からは、過去の歴史を恣意的に利用して、自らの権威を高めるために用いる傾向が広く見受けられる。例えば教皇ニコラウス1世自身、歴代教皇の中で初めて過去の教皇の発言を引用し、それでもって教皇権の権威を主張した³³。

アナスタシウスもその例外ではない。彼が『年代記三部作』を翻訳編集したことは、ローマ教

³¹ R. Forrair, *op. cit.*, pp. 49-50.

³² *Ibid.*, pp. 65-67.

³³ J. Carol, *op. cit.*, p.243.

会における歴史意識の形成に大きな影響力を及ぼしたと考えられる。アナスタシウスは書簡の中で、エウセビオスやテオドレトス、ソクラテス、ソズメノスなど過去の歴史家について言及しており、彼が意識して普遍的な教会史を編纂しようとしていたことがわかる³⁴。また 869 年の第八回公会議議事録のラテン語訳と共にアナスタシウスが教皇ハドリアヌス 2 世に宛てて送った書簡の中でも、バルダスによる総主教イグナティオスの罷免から 869 年の公会議に至るまでの、フォティオスのシスマの詳しい歴史的経緯が報告されている。もちろんその中ではバルダスや皇帝ミカエル 3 世、フォティオスなどは悪とされ、バシレイオス 1 世によるクーデターは悪行の報いであつたと見なされた³⁵。

アナスタシウスの翻訳活動は、ニコラウス 1 世の教会政策を支え、当時強力な影響力を持っていたコンスタンティノープルに思想や文化の面に対抗するためのアイデンティティ形成に一役買っていたと言えるのではないだろうか。

3 アナスタシウス・ビブリオテカリウスの書簡に見る東西教会関係

アナスタシウスにとって、ギリシャ、ないしギリシャ人とはいったいどのような存在だったのだろうか。当然のことながら、翻訳者として彼自らが訳したギリシャ人の作家、特に証聖者マクシモスのような皇帝の迫害を逃れてローマを頼った神学者や、スラヴ宣教で有名な「哲学者」コンスタンティノスのように、ローマ教会を権威として認めたギリシャ人をアナスタシウスは評価していた。

しかし他方では、直接ギリシャ人との交渉に関わった人間として、アナスタシウスは自分の交渉相手としてのギリシャ人には別の感情を抱いていたことがわかる。たとえば彼は書簡の中で以下のように 869/70 年の公会議でブルガリア教会がコンスタンティノープル総主教座のもとに組み入れられた経緯について、「ギリシャ人の欺瞞に欺かれて」と述べている³⁶。

このように考えたのは、アナスタシウスばかりではない。『サンベルタン年代記』には、次のように記されている。

そして上述のヒンクマルの聖職者たちは 8 月にローマに到着し、そこで教皇ニコラウス一世が患いつつ、彼がギリシャ人の皇帝ミカエルとバシレイオス、東方の主教たちとの間で続いていた論争に悩まされ、心を奪われているのを目撃した。そこで聖職者たちは 10 月までローマに滞在し、教皇はヒンクマルが書き記したことを好意的に受け取って、自身があらゆる点において満足したことを伝える返書を書いた。教皇はまたもう一つ別の書簡をヒンクマルとシャルル王の領域で聖職を持つ大司教と司教に対して送り、ギリシャ人の皇帝たちと東方の主

³⁴ *Monumenta Germaniae Historica Epistolae 7 Karolini Aevi* 5 (以下 MGH と略), p. 419.

³⁵ MGH, p. 407.

³⁶ MGH, p. 413.

教たちが聖なるローマ教会に対して、その実ラテン語を使う全教会に対して、誤った非難を浴びせていることを知らせた³⁷。

この記述のように、当時の西方ヨーロッパでは「ギリシャ人」に対する悪感情が珍しくない。

このような漠然とした反ビザンツ感情のほか、アナスタシウスは皇帝ロドヴィコ2世の代筆としてビザンツ皇帝バシレイオス一世に宛てた書簡の中で、皇帝ビザンツ帝国の正式名称である「ローマ」に対して、西方のローマ、及びその帝国こそが真のローマと名乗るに相応しい、とする論を展開している。

神がアブラハムの息子を石から立ち上がらせることが出来たように、フランク人たちの困難からローマ帝国の後継者たちを立ち上がらせることも出来たのである。そしてもし我々がキリストのものであるならば、使徒の後にアブラハムの子孫として生まれるように、もし我々がキリストのものならば、キリストのものであると見なされている人に可能であるかの恩寵を通じて、すべて可能であるように。また我々がキリストへの信仰を通じてアブラハムの子孫として存在するように、ユダヤ人たちは裏切のゆえにアブラハムの息子であることを望み、また善き信仰（orthodosia）のために、我々はローマ帝国の主導権を握った。ギリシャ人たちは悪しき信仰、(kacodosia)のために、ローマ人たちの皇帝であることをやめ、単に都市や帝国の座をないがしろにするだけではなく、ローマの人民や言語を内から失った。彼らは他の帝国の座へと移動し、他の人民と言語へと移り変わった³⁸。

この書簡は皇帝ロドヴィコ2世名義で、バシレイオス1世との間で問題となった皇帝称号問題、すなわち西の皇帝が「ローマ皇帝」と名乗ることに対する東のビザンツ皇帝からの非難に対する弁明、またそれとは別にイタリアのムスリム勢力に対して東西の帝国で同盟を組む申し入れのための書簡としてアナスタシウスが執筆したものである。そのため、当然その内容は皇帝の意向をそのまま写したものと言える。

しかし、アナスタシウスのローマ論で特徴的なのは、ラテン語に対する注目である。アナスタシウスはラテン語こそ正統なローマで話される言語であるとし、その価値を称揚した。別の場所でも、彼はラテン語を称賛する一方、ギリシャ語に対してはしばしばペラスゴイの言語、異国語、アカイアの言葉などと、多少侮蔑的な言葉で形容している³⁹。

政治的な面でのビザンツとの対抗関係が見られる一方、教義や慣習に対するアナスタシウスの言動はまた違った側面を見せた。

³⁷ *Annales Bertiniani*, anno 867, trans by J. Nelson, *The Annales of Saint-Bertin*, Manchester, 1991, pp. 141-2.

³⁸ MGH, p. 390.

³⁹ R. Forrair, *op. cit.*, p. 44.

9世紀後半に東西教会の間で問題となった教義・慣習上の問題は、主に聖画像崇敬とフィリオケ問題、及びその他断食の内容や塗油の方法などブルガリアへの宣教活動で明らかになった東西の慣習上の差異である。まずその一つ目、聖画像崇敬は正教会では787年の第2ニカイア公会議で正統信仰として認められ、第2次イコノクラスムを挟んで843年以降はその正統性を永続的に認められていた一方、西ヨーロッパでは特にフランク聖職者たちが795年のフランクフルト教会会議によって非難し、受け入れられていなかった。

アナスタシウスは869年の公会議の議事録と共に、787年の第2ニカイア公会議の議事録を翻訳している。教皇ヨハネス8世に送った書簡の冒頭では、第8回公会議の議事録を翻訳したにもかかわらず、第7回公会議が今までラテン語に翻訳されていないことを指摘し、自らの翻訳の有用性を主張している⁴⁰。

彼は以下のように聖画像崇敬を正統化している。アナスタシウスの聖画像崇敬擁護論の内容は、当時のビザンツのそれとは違い、ここでは簡潔な内容である⁴¹。

..... 同様に十字架の形に、キリスト教徒は全員どこであれ尊敬を持っている。このことからこう考えることが出来る。金であれ銀であれ木であれで出来ている十字架を尊崇するとき、とりわけ達成された我々の救済における十字架そのものではなく、地上で救済を行ったその人の姿と像を尊崇するがゆえに、十字架の姿と像を崇敬するのではないのだろうか？ 救済を成し遂げた人間は、その裡において同じ救済が成し遂げられた物質よりも尊ぶべきである。それゆえに、救済を成し遂げたキリストの像は、単に救済を運んだ十字架の像よりも、さらに尊崇するにふさわしい⁴²。

またもう一つ9世紀後半に初めて東西教会の間で議論の対象となったフィリオケ問題に関しても、アナスタシウスはフィリオケによって御子を聖霊の原理ないし原因と考えている、というフォティオスによる西方教会への批判に対して、あくまでローマ教会はフォティオスをはじめとする正教会の見解と変わらない立場であると強調しつつ、次のように正当化を試みている。

さらに、私は聖マクシムスが司祭マリヌス宛に執筆した聖霊の発出に関する書簡を翻訳したが、それについては、我々に対してギリシャ人は不当にも訴えているが、私がそう主張しているように、我々は御子を聖霊の原因または原理と言っているわけではない。父と子の本質の単一性を知ることなく、父から発出するように、聖霊も御子から発出し、その発出は派遣と考えられ

⁴⁰ MGH, p. 416.

⁴¹ 第2次イコノクラスム時代、正教会においてイコン神学は更なる発展を遂げた。例えば J. Travis, *In Defense of the Faith: The Theology of Patriarch Nikephoros of Constantinople*, Brooklin MA, 1984.

⁴² MGH, p. 418.

る。敬虔に解釈すると、彼（マクシムス）は両方の言語に精通して平和のために、我々とギリシャ人に聖霊はある意味では御子より発出し、別の意味では御子より発出しないと知らしめ、ある言語から別の言語へ同じ意味の言葉を表そうとする難しさを示した⁴³。

当時のローマ教会は、聖画像崇敬やフィリオクエ問題に関しては、基本的にビザンツ側の正教会と同様の見解を持っていた。アナスタシウスの書簡からは、彼もまた正教会の教義や慣習を基本的には受け入れていて、疑問を持つてはいないということがわかる。実際、これらを取り入れていたのはむしろフランク教会のほうであり、ローマ教会がフランク教会の慣習を取り入れるようになったのは、11世紀以降のことと考えられている。

しかし、アナスタシウスはフォティオスらの非難を、そのまま受け入れたわけではなかった。彼の言葉によれば、ローマ教会は「不当に」ギリシャ人によって非難されたのであり、同じ正統信仰を信じているにもかかわらず、言語という壁によって隔てられて正しく理解されていない。前述の史料でも「言語」が問題とされたが、アナスタシウスはしばしば、東およびローマ教会とフランク教会の見解の差異の原因を、ギリシャ語からラテン語の翻訳の際の誤訳に求めている。たとえば彼は次のように述べている。

…… コンスタンティノーブルで、私はしばしばギリシャ人たちをこの名称に関して非難し、尊大であると批判しようとしたが、彼らは多くの人々が *universalis* と訳す *oecumenicos* は、総主教がその称号で呼ばれているが、普遍の地域を占めるからそう呼ばれるのではなく、キリスト教徒が住むその地域を管理するものだからであると主張した。ギリシャ人が *oecumenos* と呼ぶものは、ラテン語に訳すると単なる地域ではなく、その普遍性のゆえに普遍と呼ばれるものであり、住处あるいは住むに適した土地と名付けられるものである。またどこであれ公会議のテキストで自立存在 (*subsistentia*) とされるものは、位格 (*persona*) と考えるべきであることを心に留めるべきである。ギリシャ人がヒュポスタシス *hypostasis* と呼ぶものは、何人かは *persona* と、また何人かは *subsistentia* と訳した。[以下略]⁴⁴

上記のように、アナスタシウスは相互不理解の理由を用語の差異に求めているが、その背景としては東西間の意見の不一致は誤訳その他による双方の誤解であるという認識があるように思われる。この時点での東西教会は、言説における対抗関係や細部における違いはあるものの、まだ理解しがたいものとしてお互いを見るには至っていない、と言えるのではないだろうか。

⁴³ MGH, p. 425.

⁴⁴ MGH, p. 417.

おわりに

9世紀後半の東西教会の論争、いわゆる「フォティオスのシスマ」では、8世紀半ば以降に展開したローマ教会とビザンツの関係変化が具体的な形となって現れた。8世紀半ば、ローマ教会はビザンツ皇帝との関係に加えて、新たにカロリング朝との同盟関係を結ぶこととなる。ビザンツ帝国はローマに対して未だに旧来の影響力を保ってはいたが、同時に軍事力を持たないローマ教会を外敵の脅威から防衛するカロリング朝に対し、ローマ教皇が西の皇帝位を保証するというヨーロッパ南北を繋げる新たな同盟関係が誕生した。

この新たな関係を背景として、軍事的な力を持たないが、かわりに皇帝の戴冠を保証する権威を持つ存在となったローマ教会及び教皇は、その霊的な権威というものを盛んに強調するという戦略をとりはじめた。9世紀後半になると、カロリング朝が三つに分裂したことによる影響力の低下、スラヴ系を含めカロリング朝以外の世俗の君主とローマ教会の交渉がさかんになったこと、また外敵によるローマへの脅威が比較的少なかったことを背景に、教皇ニコラウス1世はカロリング朝の領域を超えて、西ヨーロッパ全体の教会をひとつに統括するローマ教会という概念を形成し、周囲の問題に干渉した。

アナスタシウス・ビブリオテカリウスによる翻訳活動も、基本的にはこのニコラウス1世の方針を支持するものであった。彼は単性論論争やイコノクラスムの折りに異端に陥ったビザンツ皇帝を逃れ、ローマ教会に助けを求めた神学者たちの著作を翻訳し、これをもってローマ教会こそが正統信仰の護持者であり、ローマが全教会の上に立つ存在である証拠として用いようとしていたと考えられる。当然のことながら、このような主張の陰にはビザンツ帝国の首都として、また843年に聖画像崇敬を復活させ、自らこそ正統信仰の護持者と自認していたコンスタンティノーブルとの対抗関係が存在する。

ニコラウス1世やアナスタシウス、および当時のローマ教会は、ローマ教会の主張の根拠として頻繁に歴史的な背景を引用し、権威づけに用いた。アナスタシウスの『年代記三部作』をはじめとする歴史叙述は、カロリング朝、あるいはビザンツ帝国という強大な影響力を持つ外部の勢力に挟まれたなかで、それらに思想的にも政治的にも対抗するために、ローマ教会が自らのアイデンティティを形成する過程の一環であったと考えられる。

ローマとコンスタンティノーブルの間には8世紀半ばから新たに始まった対抗関係がある一方、教義や慣習、意識の面では当時の東西教会にはさほどの断絶は存在していない。むしろ、ビザンツおよびその他のキリスト教会と別の発展を見せていたのはフランク教会の方であり、ローマ教会はフランクとビザンツの間で板挟みの立場にあった。アナスタシウスは東西教会の間の教義や慣習に対する認識の違いの原因を誤解などによる相互の誤解としていて、当時の東西教会の間に断絶が意識されていたようには見えない。アナスタシウスはフォティオスに代表されるような正教会側の見解を正統信仰と認め、ローマ教会がいかにかそれに沿った見解を持っているのかを主張している。

9世紀後半のローマ教会とビザンツ正教会の対立は、この時点においては分裂や断絶というよりもむしろ、西方キリスト教世界の側からすればローマ教会のアイデンティティ確立の過程としての事件と捉えられる。東方キリスト教世界から西側の教会の慣習に対する非難が発せられると、ニコラウス1世はその知らせをフランク教会に伝えて、ローマとフランクの聖職者、ラテン語を話す聖職者全員の団結を訴えかけた。この訴えが実際にどれほどの効力を持ったのかはわからないが、少なくともローマ教会の周辺にとっては、ラテン語を使用する地域を一つのまとまりと見なす考え方が意識的に形成されたことは、重要なことではないかと思われる。

では、ビザンツ教会にとっては、9世紀後半の東西教会の対立はどのような意味を持っていたのだろうか。裁治権やローマ教会の優越性など、あくまで教会行政上の問題を訴えるローマ教会に対して、総主教フォティオスをはじめとするビザンツ側は、東西教会の間の教義や慣習の差を強調して、相手方の過ちを訴えかけている。その背景には、コンスタンティノープル側の、特にイコノクラスムを経て強調された「正統信仰の護持者」としての自認、再びキリスト教世界を統一したいという目的があったと考えられる。しかし、ビザンツ教会がローマ教会からの抵抗をどのように捉えたのか、またフランク教会というローマ教会にも制御しかねる新たな勢力の存在をどう捉えたのかについては、今後の研究で分析していきたい。